
現代的なもので、ファンタジーを旅する。

とある作者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現代的なもので、ファンタジーを旅する。

【Nコード】

N9945X

【作者名】

とある作者

【あらすじ】

いかにも普通な感じに、現代日本で暮らしていた山崎 真は、電車から降りた瞬間異世界へ飛ばされます。

一日に、現代的なものを、3つだけ召喚できる力を、わけのわからない奴に強制的に持たされてしまった山崎 真は、はたして、どのように異世界を旅するのだろうか…そんな物語です。

プロローグ（前書き）

こんにちは、とある作者です。相変わらず文才がない自分ですが、
どうもよろしく願います。投稿作品は今回で二作目で、できた
らもう一作目も見てくださいと嬉しいです。この小説は、もしかした
ら作者の都合で削除される可能性があります、その時はすみません。
基本的にこの小説は作者の気分転換的に書いているので、ものいつ
そ不定期更新です、以下の二点を踏まえてお読みください、それで
は、はじまりはじまり〜

ブローグ

「…ここどこだ」

現在起きてしまった、そんなありえない非現実的な現象に、山崎真は、ついついそんな事を、空しげにつぶやいてしまったのであった。

目の前には、まさしく、のどかな草原と山々、そして遠くに見える、まるでアルプス山脈のような高々とした山脈が広がっていた。

とりあえず彼は何故驚いているのか、おそらくそれは、この言葉を聞いただけでは想像することは難しいであろう。しかし、タイミングよく真は、次の瞬間こう言った。

「…電車から降りたら、こんな世界が広がってるとか…可笑しすぎるだろ」

そう、彼はさっきまで地球の、日本国の、東京にいたのである、しかも電車の中…真は、今日一日中暇なので、暇つぶしに秋葉原にも行くか、そう思い、自らの家の近くにある最寄りの駅から、秋葉原へ、電車へ行ったのであった、そして、十分後、電車はきちん

と、それこそ異常なほどぴったりに、秋葉原駅に着いたのである……
ここまででは問題なかったはずであった、しかし、問題はそれからであつた。

（…ここまではいいよな）

真は、自らのここまでの行動を確認した後、そのあとどうなったかを、まるで走馬灯のように思いだしていた。

（電車のドアにはそれまでは、ちゃんと秋葉原駅構内を出口と
していたはずだ、俺の記憶がそう言ってるのだから間違いない
ハズー！！）

真はそんな感じに、今までのことを思い出すのに成功した。

（しかし、俺が意気揚揚と、電車のドアから飛び出した瞬間）

「…きれいな自然の風景だな」

である。

「…どこのラノベ的展開だよ」

山崎真、彼は大の小説好きである、読む本は紙媒体、電子媒体問わずである。もちろん、ラノベだろうが、小説を読もうだろうが、所せましと呼んでいるのである、そんな彼がまっさきにそう思ったのは当然のことかもしれない。

しかし、もちろんそれだけで彼の心が静まるはずもない。

（確かに…確かにさ、自分もラノベ的展開になってくれて、ハイレムだとか、チートだとかやってみたいとか思ったことあるよ！！毎日繰り返される日常に飽き飽きしてた時もあったさ、けどさ…さすがにこれはないだろ…）

真はそんな感じに半分キレながらそう思った。

「…おそらく、ここは異世界だな」

真は、それこそ毎日と呼んでいた、小説を読もうで流行？していた異世界トリップ物を元に直感的にそう思った。

「……………」

ひゅ—————

しかし、この異世界トリップはないだろ…と彼は思った。

（せめてさ、美少女が俺を勇者として召喚してくれたとか、そんな感じだったらいいのに）

真はそう思ったが、もちろん、目の前に召喚用の魔法陣も、召喚師としての美少女もいなかった。

ひゅ—————

風が…ただただ貫くように吹いてゆくだけだった…

「…ん？なんか違和感が」

真は、お尻に何か張られているような違和感を感じ、自らのおしりを触ってみた。

「…なんで、尻に紙が張られてあるんだよ!!」

なぜか、自らの尻に感触的に紙らしきものが張られていることに気づき、ちよつとばかりイライラしながら、紙を尻から取り外し、なんだこれ？そんな感じに紙を見た。

形状は大学ノートの一ページを荒々しく破いたような感じの紙であつた、もうちよつときれいに破れよ!!そう真が思ったが、その紙に何かが書かれてあることに気づき、改めて紙を見つめた。

そこにはこんな事が書かれてあつた。

説明書

1、あなたは、異世界へ転移しました。
2、それだけでは、つまらないので、あなたは自分の世界で存在していた、もしくは存在している物を、1日に3つだけ、あなたの視界内の何処にでも召喚させる事ができます。

3、あと、あなたの精神をちよつと弄りました。
あなたはこの様に異世界に突然転移しても取り乱したり、パニックも起こしませんし、人を殺してもそれは同じです。

4、あとは、のんびり異世界ライフをおもいつきり楽しんでください。

「・・・はあ？」

そんな感じの、かなりふざけたような内容が、その乱暴に破かれた感じのノートに書かれてあった。

「・・・」

真は、茫然としながら、周りを見渡した。

もちろん見えるのは、彼を今まで色々な、危険やらなんやらから守ってくれた、馴染みのある大都市ではなく、のどかな草原と山々、そして遠くに見える、まるでアルプス山脈のような高々とした山脈…簡単にいえば、ここには人間の形跡も…彼を元の世界のように保護してくれた国、警察、家族もない。もちろん、知り合いも頼れる人も…

「・・・」

しかし、真はさらに違う意味で茫然としてしまった。なぜなら、そんな、普通の人にとってみれば、狂ってしまいそうな環境に置かれたということを認識してしまったのに、それを何とも感じない、まるで今までもそうだったじゃないか、という、そんな感じの自分に、茫然としてしまったのである。

「…これから俺はどうすればいいんだ」

ひゅー――――

と、風が山脈下り、そして山々、次に近くにある大量に木々が生い茂る、森の中を通り、最後に、マコトのいる草原を駆け廻り、真を、その自らの風で貫いたあと。

これまた、青々とした、大空に向かって、溶けていった。

プロローグ（後書き）

感想は、作者を動かす燃料です、（称賛、批判等問わず）どうか燃料の補給をよろしくお願いします。

とりあえずの現状確認

「・・・さて、どうするか」

真はこんな状況下に置かれてもなお、何も感じず、落ち着いている自分を恨みながらそうつぶやいた。

いままで真は、何で尻にこんな大事な物張るんだよ、絶対これ張った奴は悪意あるだとか、誰なんだよ俺にこの手紙を書いたやつは！とか、そんな愚痴を永遠と言っていたが、そんなこと言っても状況は打開するはずもなく、結局真は愚痴を言うのも止めて、現実的にこれからどうするればいいのか考えなければならぬと思ひ、そう呟いたのだった。

まず、真は自分が持っている物を確認した。

ナップザックに、その中にある物として、メモ帳、筆箱、その中にあるシャーペン5本、マーカーペン1本、ネームペン一本、蛍光ペン、赤、青、黄色、緑、金色の5本、鉛筆3本、消しゴム2個、20?物差し一個、コンパス1個、ハサミ一個、修正ペン一個、560円区間の切符、財布、そしてその中にある5000円札と小銭として568円が有るのみであった。

「...まあ、秋葉原に遊びに行くだけだったし、これぐらいしか持ってきてないのは当たり前か」

真は自分の持ち物の確認を終えた後、とりあえずナップザックを置きこつ呟いた。

「次に、ここがどんな異世界かだ」
真はまず、そのことについて考えた。

（まず異世界にといっても色々ある、剣と魔法の世界、技術が異様に発達した世界、魔法と科学の世界だとかだな）

その時一瞬、真は、ここには人間もいない、ただ豊かな自然だけが広がる世界かもしれないと思ったが、それはないとなぜか納得していた。

なぜなら展開的にそれはないだろうと、いままで読んできた小説を元にそう思ったのである。

最もそうでもない可能性もあるのだが・・・

そんな考えを、真はあまり考えないようにした。

（・・・こればかりは調べてみるしかないな）

目の前にある風景だけで、ここがどんな世界なのかなんて分かるわけもなく、こればかりは現地で調べてみるしかない、真はそう思い、このことについてはとりあえず保留ということにして置くことにしたのであった。

次に、この世界の言葉やら、言語の問題について、

大体このパターンでは、補正がついて言葉言語、両方とも何故か理解できるか、もしくは言葉が通じて、言語を書く、もしくは読むことはできないかである。

しかし、このことについても、同じく確かめようもないので、真はまた保留にすることにした。

後は、召喚について

手紙には、真の世界、つまり地球に存在しているか、もしくはしていた物を一日に3つだけ、召喚できると書かれてある、一日に3つだけとはいえ、つまりこれは、真の世界に存在している道具はもちろん、昔は存在していた物までも召喚できることを意味している。

また、なんでも召喚できるところから…それこそ、10円のうまい棒から、戦艦大和まで召喚できることになってしまふ…。もっとも、大和なんて召喚しても、操縦なんてできないから意味なし、同じことは航空機や戦車にも言える。

しかし、真はそのことから…とある究極の攻撃ができてしまふと言う、考えにたどり着いたのであった。

「…てことは核爆弾も召喚できるということか」

（視界内のどこにでもだから、リトルボーイなんかを上空のどこかにでも召喚すれば、簡単に核攻撃できる…やばい…これはチートだぜ…）

真はそう思ったが、しかし、

（…と言っても、日本人としてはさすがにそんな攻撃はしたくないけど）

唯一の被爆国の日本人である真がそう思ったのは当然のことであった。

（もっとも、今の所その必要性もないし、これは最終手段としてとっておこう）

真はそう思い、次に、召喚できる1個の単位について考えてみた。

たとえば、飴をなめたいと思った時、たった一粒の飴玉しか召喚できないのか、それとも飴玉の袋ごとという一個の範囲で、大量に飴玉を召喚できるかどうかである。

（これからの食糧についてのこともあるし…ぜひとも後者であつてほしいが…これは実際に召喚してみなければ分からないしな…）それに、一日に召喚できるものは三つしかない、これは慎重にやらなくては…無駄遣いはできない…

結局真は、このことも、この世界について調べながら考えることにした。

次に武装

武装については、簡単に決まった、真の世界で、何とかやり方でも本で分かっている、初心者でも扱えて、なおかつ威力があるものと言ったら拳銃しかないのであった。

（明らかに、身を守るにも必要だし、俺をここに転移させたやつ
の性格から考えると、あまり治安のよさそうな世界ではないはずだ）

それに本当にちゃんと召喚できるか確かめる必要もあるしな…

真は考えに考えそう思い、最初に召喚するものとして、真は銃にはあまり詳しくないが、たしか、H & amp; K USPとか言う銃が、初心者でも扱えて、なおかつ結構な威力があると、どこかの小説にでも書かれてあったことを思いだし、それを召喚することにした。

「…具体的にどう召喚すればいいんだろう」

手紙にはそういったことは全く書かれていなかったし、どうすればいいのだから

真は、そう迷いながら、こうなったら適当にやってみようと思い、真はさっそく実行することにした。

「召喚!!」

「・・・」

反応はなかった…

「山崎真が告げる、H & K USPを召喚せよ!!」

真は、もしかしたらもうちょっと具体的に言わなくてはいけないのか？そう考え、今度は、はっきりと、アニメとかで見た魔法使いが言っていた呪文みたいに叫び、なおかつ、召喚するものをイメージしながら叫んだ。

そのことが功をそうしたのだろうか、突然「バツ!!」という乾いた音とともにまさしく物理法則に真っ向からケン力を売ることが、突然、拳銃・・・H & K USPが忽然と、真の足元に現れたのである。

「・・・すげーな」

一体どういう仕組みなのか、検討もつかないが、初めて見る光景に高揚感感じていた。

（とりあえず、召喚の仕方は分かった、自分の名前と召喚する者の名所を言い、なおかつ、召喚するものをイメージすればいいのか）

真はそう思いながら、足元にあるH & K USP（以下拳銃）を掴んでみた、しかしその瞬間、真は驚くべきものを目にすることに

なつた。

「ブン」

「のはー!!」

拳銃をつかんだ瞬間、機械的な音とともに、真の目の前によく、RPGとかで使われるウィンドウが突然、いかにも未来的な感じに立体的に表れたのである。

真は何とか冷静になりながらも、一応、そのウィンドウ?に書かれてあるものを読んでみた。

山崎 真 十七歳 桜坂高等学校2年生

レベル1

種族 人間

HP	10
MP	0
魔力	0
攻撃力	1
防御力	1
精神力	1000
称号	異世界召喚師
特性	近代兵器操作術 1867年
祝福	なし
武術技	なし
魔法技	なし
現在地	ハーストリア帝国 ヨネハの森林地帯
装備	H&K USP(9mm弾モデル)残り弾数 15

道具 ナップザック

次のレベルまであと、100

残り召喚数2

「…なんだこれ？」

真は突然現れたウィンドウとともに、そこに書かれてあったもの咄然とした。

（つまりこれは、なんだ？俺のステータスって奴？）

一樣、真はRPG物も少々やったことがあるので、直感的にそう思ったのであった。

「…」

真はもう一度ウィンドウに目をやった。

（…俺のレベルが1で、HPが10、魔力とMPなんか0、攻撃と防御が1、明らかに可笑しい精神力1000…まあこれは…おそらく謎の奴が精神をいじくったという影響だということはわかるが…それに、この世界の基本的な数値がわからないから、俺が強いのか、それとも弱いのか分からないな…）

真は自らの数値を見ながらそんな感想を抱いた。

「…はあー」

しかし真は、何故だか分からないが、直感的に、おそらく自分は弱いだろうと思っていた、レベル1だし…あとは魔法技とか祝福なんと言うよく分からないものもあるが、一体、これはどういったもの

なのか、真にはさっぱりわからないので保留するしかなかった、まあ、悲しいことに、真にはどれもなしだから関係ないが。

(…異世界召喚師とか言う称号は、おそらくおれの世界から武器なんかを召喚できる能力のことだろうという位は、俺にでもわかる、種族が人間ということも、道具にナツプザックも、装備が指すのはこの拳銃だということも分かる、じゃあ、特性の近代兵器操作術1867年は一体何なんだ…)

真は自分のステータスの中で、近代兵器操作術という手紙にも書いてなかった物にチートとなれるかもしれないと言う期待を含みながら、一体これはどういったものなのかを考えていた。

(…これはもしかしたら、俺が近代兵器を扱えるとかじゃないか？某使い魔のガンダー。ブみたいに)

真は、心の底からそのことに喜びながらも、しかし、自らが拳銃を握っていても、拳銃の詳しい使い方が頭に流れ込んでくるとかいうことはなかった。

(…違うのか…俺が近代兵器を扱うことができないとも言つか…いや待てよ考える)

真は特性の欄内にある、近代兵器操作術の横の、1867年という数字に注目した。

(…これって、俺の世界の西暦ほくないか？横に年とか書いてあるし)

そのことに真は気づき、そしてそのことの意味に気づいた。

(…ッ！これはもしかして、使える兵器の年代じゃないのか？たとえばこれは、1867年までに開発された兵器が使えること示し、そしてそれ以降に開発された兵器は扱うことができないといこ

とか！！）

なるほど…そういう事か、と真は納得すると同時に、じゃあこの拳銃召喚した意味ほとんどなくね？とも思ったが、今更返品などできるはずもなく、まさか捨てるのももったいないので、そのまま持っていることにした。

（また召喚するにしてももったいないし、またあとで考えよう）
真は思った。

（…とりあえず…近代兵器操作術というのはどういふのかは分かった、次に、現在地？についてだ）

真は、今度ウインドウの現在地の欄について注目した。

（ハーストリア帝国？オーストリアと名前が似ているが…気のせいか？）

真は自分の世界にある国の名前にちよつとばかり似ているハーストリア帝国が一体どのような国なのか、そしてもしかしたらあるかも知れないオーストリアとの関連性についても考えた。

（…だめだ、ちつともこの世界が結局どういった世界なのかは分からない）

唯一ステータスから分かるのは、魔法力や、魔力、魔法技などから、この世界には魔法があること位は分かるが、聖徳太子でも、東大卒でもないただの高校生の真が、たったそれだけの情報で、この世界のことを、分かるはずもなかった。

（…とりあえず、ステータスの種族なんかがあることから、ファンタジーな世界かも知れないし、そうでなくても、人間なんかは絶対いるだろう、とりあえず、道やら町やらなんかを探してみるか）

精神をいじくられたことにより、あまり緊張感を感じなくなった真は、冷静にそうまとめることができ、とりあえず、そこらに人のいる場所は有るか無いかを探しながら、ステータスの事やら、異世召還師を使つての新たな攻撃も考えながら、歩くことにした。

（…とりあえずステータスをいったん消すか）

真は一瞬ステータスはどうかやったら消すことができるのか迷ったが、消えろと念じれば消えたので、試しにまた表れると念じたら表れたので、とりあえず大体のステータスの操り方は分かったのであった。

「…さて…一様懂れだった異世界を翻弄する旅を、始めるとしますか、」

真はそう呟き、元の世界の東京とは比べ物にならないくらいのもので、大自然に、一様、足を踏み入れたのであった。

とりあえずの現状確認（後書き）

だめだ…これを書いただけで燃料が底をついた…小説を書くって本当に大変だな。

だれか…感想をくれたら嬉しいな…

後、1867年は大政奉還の年です、自分としては、近代兵器の始まりと言ったらここら辺だと思ったからです。そしてなぜわざわざ使える兵器に制限を課したかというと、いきなり90式戦車やら、F22使って無双しても、面白くないからです。やっぱりだんだん強くなっていくのがいいな。

…できれば、助言とかもほしいです…

ゴブリンを拳銃で倒す話（前書き）

至極簡単な登場人物紹介

山？ 真 十七歳 桜坂高等学校生

秋葉に遊びに行ったら不意打ちにもほどがあるような感じに電車から降りたら異世界へ飛ばされた人、人によって意見は分かれるかわいそうな人、または運のいい人、どうやら謎の人物に遊び感覚で異世界に転移させられたようで、その証拠に手紙が置いてあった、一応強制的に貰われた能力である、異世界召喚師の力を持っている。

これはマコトが居た世界において、存在している物、もしくは存在していたものを召喚できる能力である。哀れ、真はこの能力で異世界を旅していくこととなる。

趣味は読書 特技は読書 得意技は読書 得意教科は読書である。

まあとりあえず読書が好きな奴である。

一応、この物語の主人公である。

ゴブリンを拳銃で倒す話

ここはヨネハの森、ハーストリア王国にある結構な規模の森である。

そんな森の中を走っている17歳位の少女がいた。

「はっ…はっ」

まるで川のように流れるような、そのうえ、水滴がこぼれそうなくらい美しい水色のロングヘアーに、美しい水色の瞳、鈴のが鳴るかのような、きれいな声、そして、雪のようにきめ細やかな肌…如何にもその容姿は、ラノベのヒロインを具現化したような…まあ、簡単にいえば、超のつく美少女であった。

「はっ…はっ」

しかし、その美少女には、似つかわしくない物があつた。

「はっ…はっ…痛い…痛いよ」

彼女がそう叫びながら手で押さえる場所をよく見てみると、足の肘に生々しい傷跡があつたのである、しかも、ずいぶん放置していたのか、膿んでもいる。

「…う…痛いよ…」

少女の体を今一度良く見ていると、先ほどの傷程ではないにせよ、あちら此方に擦り傷の跡があつた。

「はっ…はっだめ…疲れた」

少女は体を極限にまで酷使した様で、その影響からか、倒れこんでしまった。

「はっ…はあ…ぐすん…」

少女はいつの間にか、忘れていた涙を、思い出したかのように流しだし始めた。

「う…う…う…」

少女は泣きながら、こう呟いた。

「助けてよ…誰か…」

「……………」

しかし、そんなことを言っている間も、こんな森の中に、都合よく人がいるはずもなく…ただその少女の声は、誰の耳に歩届かず、ただいたずらに、森の中へ溶けていくだけであつた。

「う…う…ぐすん」

少女はまた、激痛が走る左足を引きずりながら、とぼとぼと歩き始めた。

「…なんだあれ？」

もちろん真はそんな少女の存在など知る由もなく、彼もまたヨネハの森を絶賛探検中であつた。

さて、おそらく誰もがこの言葉を聞いただけでは、真が何を見てしまったのかは分からないだろう。

しかし、真はまるで、そんな空気を読むがごとく、ちょうどいいタイミングで自らが遭遇してしまったものを言ってくれた。

「…ゴブリンだよな…あれ、絶対」

真は一樣、見つからないために、すぐそばにあつた木の陰に隠れながら、RPGの常連ともいうべきモンスターの名前を言った。

奇妙な長い耳、人間の鼻の3倍ぐらいでデカイ鼻、四本の指、一応ボロボロの赤い洋服を着ていて、武装として、はこぼれを起こしている剣を持っていた。

(…どうする)

真はそう思いながらゴブリンを見つめる。

幸いにもゴブリンは真の存在に気付いている様子はなく、のんびりボケーとしながら、とことこと歩いていた。

(ここは異世界だし、ゴブリンがいても別に不思議ではない、いや、むしろそれは当然のことかもしれない、しかし、どうするか…)
真が読んだ小説の中で登場するゴブリンは、大体は害のある雑魚モンスターとして登場するが、中には種族として、人間と共に暮らしていると言う設定の小説もあつたため、そして、一応日本人としての感性はあの謎の人物からの攻撃？から逃れたのか、ちゃんと残っており、そのため真は、いきなり出会いがしらにゴブリンを殺すことを躊躇していたのであつた。

(…マジでどうしよう、アイツが居るんじゃ、向こう側に行けないじゃないか)

実は真は、これまで何の目的もなくフラフラしていたわけでもない、ちゃんと森の中を歩きながら、川を探していたのである。

何故かと聞かれれば、川を見つけて下れば、もしかしたら人間の暮らしている町につけるかもしれないという希望的観測にしたがつて、真は、川を絶賛探していたのである。

そして、2時間探して、ようやく川を見つけたのだが、そこにとっせんぼうするがごとく、ゴブリンが居たのである。

「…あ！そうだ」

突然真は何か思いついたらしく、ゴブリンに気づかれないよう、そうつぶやいた。

「…」

「ブン」

真はもしかしたら、さっきのウィンドウみたいに、ゴブリンのステータスを念じれば見れるかも知れないと思い、さっそくあのゴブリンのステータス現れる！！てな感じにやってみた、そしたら案の定、ゴブリンのステータスが真の目の前にこれ又忽然と表示された。

ゴブリン

レベル5

初級モンスター

HP 30

M P	0
魔力	0
攻撃力	14
防御力	12
精神力	23
称号	なし
武術技	拾った剣を振り下ろす、ゴブリンパンチ
魔法技	なし
現在地	ハーストリア帝国　ヨネハの森林地帯
装備	はこぼれを起こした剣
道具	ぼろぼろの赤い服

次のレベルまで　????

(…ゴブリン俺より強えー！！！)

ステータスを見て、レベルが俺より上だし、攻撃力、防御力共に、明らかに真より強かったのであった。

(やっぱり俺って、初級モンスターとか言うゴブリンより弱いと言っことなのか…)

真はその事実には落胆しながらそう思った。

(…まあそれは仕方ないかな…俺は別に運動しているわけでもなく、帰宅部だし、剣を余裕で振り回すゴブリンよりか弱いのは当然のことかもしれないし)

しかし、そんなことを気にしていても川には渡れない、とりあえずこのゴブリンをどうするかを決めなくてはならなかった。

(…こうなったら、迂回するか、別にここを通らなくては川に行

けないわけでもないし、無駄な争いは嫌だし、それに拳銃の弾だつてもつたいない、ここは逃げるのが一番だな)

真はそんな感じに、迂回して川を目指すことに決定すると、さっそくそれを実行しようと思い、ゴブリンから一旦離れようとしたその時！！

「からん、かららん」

「…やべ」

ついつい、勢い余って、石を蹴ってしまうという、ありがちな展開を起こしてしまったのであった。

「…」

真はゴブリンの方向を恐る恐るゆっくりとむいてみた。

そしてそこには、そんなドジなことをやってしまった、真の姿を確認し、凝視するゴブリンの姿があったのであった。

「…ハロー、今日もいい天気ですね」

真はこのゴブリンが、もしかしたら人間にやさしいゴブリンだということを祈りながら、そして、苦笑いを行いながら、そう言った。

しかし、世の中日本の景気のように、うまくいかないのが常のように、真もまた、運に見放されたのであった。

「ぎゃーーーーー！！」

そんな、真めがけて、ゴブリンが奇声を上げながら、なおかつ剣を振りかざし、真に迫ったのだった。

「はぁー、不運だぜこれは！！」

しかし真はいたって冷静だった、おそらく精神を弄られたからである、真もそのことにきづきながらも、皮肉げにこう呟いた。

「本当に不運だぜこんちくしょ!!」

真は銃など撃ったどころか、触ったことすらないのだが、精神が弄られた影響か、なんの問題もなく拳銃をゴブリンに構える。

「…魔法や剣ではなく、銃でゴブリンと戦う俺って、なんだか可笑しくね？」

何気なく真はそんなことを思いながらも、躊躇なく、引き金を引いた。

「ダン!!」

と、乾いた音が、森の中を響き渡った。

真は銃をもちろん撃ったこともなく、しかも、彼の今まで読んだ本に拳銃の使い方が書かれてあった物があつたからこそ、キチンと打てるというありさまである。さらに、H & K USPは1867年以降に開発されたものであり、補正も効かないので、例え撃つたとしても命中率が最悪なはずであつた、しかし、しかしである。

いわゆる真には、精神を弄られたおかげで、銃初心者によくある、恐怖心が全くなく、また、実戦のような極限状態に置かれてまったくもって冷静であつたし、撃つと決めれば、それこそプロの兵隊のように、躊躇なく打つことができた。

しかも、ゴブリンの目には、真は全く武器らしき物を身につけていないと映つたのか、何も考えず、ただ単に自らが持っている剣で簡単に殺せると思い、ただ悠々と、完全に油断しながら、真に向かって走って行くだけであつた。

そして、それらの要素が重なつたうえ、どうやら運も良かったのか、拳銃の弾は見事、ゴブリンの頭を貫いていたのであつた。

「ぎ…」

そんな断末魔をゴブリンは叫び、頭から赤い血を流しながら、どさっと倒れ伏せ、そのまま動かなくなった。

「…銃を撃つても…そしてゴブリンみたいな人間に近い姿をした生き物を殺しても…何の罪悪感も湧かないとか…俺…おかしくねーか…」

人並みの大きさの生物を殺したにもかかわらず、そして何の躊躇もなく銃を撃つことを出来たそんな自分に、真は嫌悪感を感じ、銃を持っている右手をだらんと垂らしながら、暗い気持ちで、とぼとぼと、頭部を撃ち抜かれたゴブリンの死体の横を歩き、川に向かった…。

「りーん、りーん、りーん」

「…だめだ、とても今日中に、人間のいそうな町に着くことなど、不可能だな」

真はあの後、川を下り、人間の町にたどりつくこと祈りながら、敗残兵が撤退するみたいに、とぼとぼと川沿いを下ったのであった、幸いにも川の大きさが広いためか、川の隅は木などの障害物もなく小石のみだったので、森のなかよりも断然歩きやすく、また、ゴブリンのようなモンスターにも会うことなどもなかった。

しかし、どうやら真はそう言った事に恵まれながらも、結局は人間の町に辿り着くことができないまま、夜を迎えてしまったのであった。

「…月が5つもあるな…」

異世界で定番の大量にある月を見ながら、真はそうつぶやくのであった。これもまた精神が弄られたためか、そして月が5つもあっても何故か明るさは元の世界と変わらないためか、別に取り乱すこともなく、のんびりと大量にある月を見ながら、そう呟くのであった。

「…ここで、野宿するしかないか」

はあー、と、ため息をつきながら、そう呟いた。

しかし、真はそんな現代日本の…悪く言えば毎日ベットで寝るのが当たり前なおぼっちゃまである、川のごつごつした岩の上で寝られるほど、真の体がしつかりとしているはずもない。

「…ぐ」

それに腹も減っていたのであった。

「はあー、とりあえず何か召喚しないと、特に今日は例年になく歩き回ったせいで、いつもに増して腹が減ったしな…」

というわけで真は、さっそく何を召喚すればいいのかを決めることにした。

「…これはよく考えなければ…いったい何を召喚すればちゃんとしたねどこも得ることもでき、なおかつ、食料を手に入れることができるかだ…」

うーん、と、真は考える人みたいに、頭を抱えながら、なにかそう言ったものを一気に召喚できる道があるはずだと思い、自らの記憶を探って行った。

「…そうだ！！3カ月前ぐらいに、確か家族で、キャンプをした時があったな、そしてその時の持ち物の中に、寝袋と、携行用のガスコンロと、小さなヤカンみたいな食器などと、10個ぐらいのカップラーメン入った、段ボールがあったはずだ…存在していたもの、つまり、今現在存在していない物でも召喚できるのなら、そう言うのだって召喚できるはず」

真は、そのことを思い出した自分に感心しながら、さっそく召喚して見ることにした。

（…どうか、召喚できますように）

真はそんなことを思いながらも、とりあえず必要かどうかは知らないが、よくわからない、召喚の構え？をした。

「…山崎真が告げる、キャンプ行った時にあった、引っ越しのサカイのマークのある段ボール箱を召喚せよ！！」

ずいぶん適当な感じに言ってしまったが、いくらなんでもそこまで詳細に思いだすことなどできるはずもなく、ただ、抜本的にそういうしかなかったのである。

しかし、どうやら真はちゃんとその段ボール箱の特徴を頭の中でイメージできたお陰か、「バー！！」という乾いた音と共に、真の目の前に忽然と、ワープしてきたかのように、引っ越しのサカイ印の段ボール箱が表れたのであった。

「…やべ、便利だわこの能力」

真は、素直にそんな感想抱いたのであった。

ゴブリンを拳銃で倒す話（後書き）

自分の作品を評価してくださった皆様、お気に入りに登録してくださった皆様、本当にありがとうございます。

これからも、自分の作品をぜひ楽しんでくださってください。

よくある美少女を助ける話

「…」

「パチッ…パチッ」

「…まさか、暇つぶしに秋葉に行ったただけなのに、今はこうして異世界でたき火を炊いて、カップラーメン食ってるとか…世の中どんなことがあるか想像もできません」

自らが焚いた焚き火に照らされながら、真はもっともらしいことを、5つもある月をみながら、お月見の如くカップラーメンを食べながらそう言った。

「…カップラーメンで、なんで家で食うより、こうしてキャンプ的な感じで食べる方がうまいんだろ」

そんな永遠の謎を、真は暇つぶし的に呟くのだった。

ちなみに真がなぜに焚火などを焚いてるのかと言うと、一重に寒かったからである。

「…気温14度…昼は明らかに20度以上ぐらいはあったはずなのだが…これは寒すぎだろ」

段ボールの中に、何故かおまけ的に入っていた気温計を見ながら、今までの気温との、あり得ないほどの落差に、ため息をつきながら、そう思うのであった。

「…」

携行用のガスコンロで、ヤカンの中身が、ぐつぐつとお湯が沸いている様子を見ながら、真はこれからのことをどうすればいいのか、考えていた。

「…とりあえずは、当面の目標は、人に会うことだ、幸いこの世界がおそらくファンタジーな世界であることだけは、さっきのゴブリンの件で、証明済みだ」

可能性としては98%ぐらいかな？真はそんなことを思い、次に元の世界に戻るかどうかについて考え始めた。

「…大抵の異世界トリップ物の小説は…かなりの確率で、その住民になったり、自ら進んで住民になることを決意したりして、そのまま元の世界に帰らないまま、ファンタジーの世界でハッピーエンド、という感じで終わるから…俺もそうなるかもしれん」

真は、自らが読んでいた異世界トリップ物の本についての最終的展開を思い出しながらそう思った。

（…しかし、俺としては、元の世界に帰りたいよな、確かにこの能力は凄まじいほど便利だけど、やっぱり家族も友人もいて、そしてのんびりと平和に暮らしていた今までの日常の方が断然いい、一応、最終目標として、元の世界にけることを目標として掲げるか…）真はそう思い、自らの目標は元の世界に帰ることだということを改めて決意し、同時に如何にして帰れるかを考えていた。

（…もしかしたら、この世界には、異世界を渡る魔法とかもあるかもしれない、今はそれに頼るしかないな…）しかし、浮かんだのはそんな希望的観測な物だけであった。

「はあー、もしレベルが上がってそんなの出来るようになったらうれしいんだけど…いや待てよ、レベル？」

真は、そう言えば、もしかしたら自分のレベル、先ほどのゴブリンを倒したことにより、アップしているかもしれないと思い、すぐさま、自らのウィンドウを急いで開いてみた。

山崎 真 十七歳 桜坂高等学校二年生

レベル2

種族 人間

HP 15

MP 0

魔力 0

攻撃力 3

防御力 4

精神力 1000

称号 異世界召喚師

特性 近代兵器操作術 1868年

祝福 なし

武術技 なし

魔法技 なし

現在地 ハーストリア帝国 ゲベラルの川の畔

装備 H&K USP(9mm弾モデル) 残り弾数14

道具 ナップザック 食べかけのカップヌードル 木のはし、

携行用ガスコンロ 他

次のレベルまであと、 87

残り召喚数 1

「…これは…もしや…」

真は単にレベルが上がったことより、あるものが上がったことに歓喜していた。

「近代兵器操作術が、1867年から、1868年に上がってい

る!!」

真は、つい持っていた食べかけのカップヌードルを零し掛けるほど、歓喜したのであった。

（こっこれは…ものすごい発見だぜ、ホントマジで、もしかしてレベルが1上がることに、近代兵器操作術も一年単位で、上がっていくのではないか？）

レベルが1上がったことにより、近代兵器操作術が一年上がったことが証拠だと、真は思った。

「…だとしたら…ホント素晴らしいな!!」

これなら、地道にレベル上げをしていけば、最終的に、現代の兵器を操縦することが可能となれることを、真はそれこそ踊ってみたくなるほど歓喜しながら、確信したのであった。

「……………」

遠くに、人の声と、焚き火の音が、少女の耳に響いた。

「…焚き火…温かそう…」

その少女は、あの大けがを負った少女だった。

「……」

少女は意識がはつきりしていないのか、半ば無意識と言ってもいい感じに、真が焚く焚き火へと、まるで電灯に集まる虫のごとく、吸いこまれるようにフラフラと、歩いて行った。

「……はい？」

真は目の前で起きた出来事に、完全に、それこそ日本軍のカミカゼの攻撃にシヨックを受けた米軍のごとく、目の前の出来事が信じきれないような感じに、そう呟いたのであった。

なぜ真がそのようなことを言うのか、それは一重にこういうことであつた

「……いきなり森の中から青髪の美少女が表れたかと思ったら、いきなりその少女が俺の目の前で倒れ伏せるって、どんなフラグ？」

そう、真の目の前には、長距離走に力を使い果たしたようにいきなり森から表れたと思つたら、これまたいきなり倒れ伏せた超のつく美少女が居たのであつた。しかもただの美少女ではない、来ている服も、何故だかぼろぼろであつた。

「…」

とりあえず、真はおそろおそろ、一応、なにやら苦しそうだったの
で、放っておけるはずもなく、このいきなり倒れ伏せた彼女の体を
調べてみた…読者の諸君、真は別にやましいことをしたいのではな
いのだよ、ただ彼女の体を見るだけ…残念ながらやましいな…

「…げ」

一応、精神を弄られたとしても、このような美少女の体を調べるの
はものすごく恥ずかしいのか、顔を赤めらせながら、彼は倒れてい
る彼女を、現状のような伏せている体制ではなく、キチンとした仰
向けの体制で寝かしてみることにした、すると…

「…随分と生々しい傷跡だな」

真の見つめる足の肘には、彼女のきめ細やかな白い肌には、まった
くもって似つかわしくない、今もなお、血を流し続けている、生々
しい傷跡であったのである、しかも、長時間ほったらかしにしてあ
った影響か、膿んでもいる、それにこの怪我ほどもないが、他に
も少女の体の所々に切り傷などがあつた。

「…こいつは手当するしかないよな」

世界的にもお人好しの日本人、その上大のラノベファンである真は、
当然のことながら、少女を助けるために即座に行動するのであつた。

（もったいないが、医療器具を召喚するか…いや医療器具とい
つても、この一般ピープルな俺にでもできるような治療法だなんて
あんまりないんだけどな…）

しかし、まあ、そんな一般人にも簡単にできそうな治療でも、や
らないよりはマシである、そう思った真は、さっそく召喚の構え
？に入った、

「山崎真が告げる、俺の部屋にある、救急箱を召喚せよ!!」

美少女助けることも手伝ってか、わざわざ仮面ライダーの変身を決めた時のような…そんなポーズを態々しながらそう叫ぶ彼…今の彼の姿は中二病にしか見えないのは作者だけなのだろうか。

しかしまあ、そんな振り付け関係なく、きちんと、それこそわが社は宅配を必ず時間ちょうどに完璧に届けてあげます、とか、そんなよくわからない例えのごとく。目の前に真の部屋にあった救急箱が召喚されたのであった。

「…さて、やりますか」

召喚された救急箱を見ながら、山崎真はそう呟いた。

ちなみに、寝袋が一つしかないと言う悲劇に気付くのは、この少女の治療が終わってからのことであつた。

5つもある月がだんだんと薄くなり、異世界に、朝日が差し込んでくるのを、真は涙を流しながら、そんな美しい光景を見つめていた。

結局彼は、こんな怪我を負った美少女をそのまんま石の上で寝かせておけるはずもなく、自らが使う予定であつた寝袋を少女に使わせてあげたのであつた。

その反動とも言つべきか、もちろん寝袋は一つしかなく、必然的に彼は固いごつごつとした石の上で寝ることとなつたのである。

しかし勿論のこと、石の上で真が寝られるはずもなく、しようがないので、近くの森の中にあつた草木を抜き取り、下に引くことによつて、石のごつごつした感触を和らげようとしたのだが、焼け石に水とはこのこと、そして日銀の円相場介入のごとく、まったく効果がなかった。しかし、かと言って焚火から離れた寒く、そして暗い森の中で寝れるはずもなく、結局真は不幸にも、一日中起きていたのであつた。

「……」
それと彼を苦しめる要素がもう一つあつた。

それはなにか、簡単なことである……目の前に無防備な超絶美少女が居るからであつた。

「……」
しかし、別に目の前に美少女が居たから、自らの男の本能を抑えるのに苦労したからではなく、別に意味の……そのような美少女が居ても、あんまりなにも感じない自分が居たことに真は苦しんでいたのであつた。

「……ついに俺は男としての本能まで失つたか……こんな無防備な美少女が目の前にいるのに、近づいても精々顔が赤くなるだけだなんて……」

ひゅー……
まだ夜の寒さを残しているような風が、真を貫いたのであつた。

「……」

真は少女の顔を見つめた。

夜の時も、もはや神に愛されまくっているのかと思うほどの造形美で雪のように白く、きめ細やかな顔は、焚火にあやしく照らされ、まるで焚火の明かりそのものが彼女の装飾品かのように彼女を美しく仕立て上げていたが、いまはそれ以上の美しい朝日が、彼女を照らし上げ、ただでさえ美しいのにさらに美しくしてなってしまうと言う悪循環？があり、普通の男なら直視できないか襲っちゃいそうになっちゃうほど美しかったのだが……

「……だめだ、精々クラスのかわいい女の子を見つめている程度にしかない……」

悲しいことに、精神を弄られてしまった真には、それ位にしか感じていなかったのであつた……それと同時に、こんな如何にもラノベ的展開になっているにもかかわらず、そんな風にしか思わない自分に、真は悲しくなってきたのであつた……

「……そうだ、彼女のステータス、まだ見てなかったな」

真はそのことを思い出し、彼女のステータスをこっそり見ることにしてみた、べつべつにやましいことではない、この世界の人間の平均的な身体能力？を見てみるだけだと、真はだれもいないのにそんな言い訳を思っていた。

???????? 17歳 ??????

レベル26

種族 人間？

異常状態 身体の破損

HP	10 / 100
MP	10 / 1000
魔力	データがロックされています
攻撃力	18
防御力	23
精神力	12
称号	データが破損しています
特性	天才
祝福	データが破損しています
武術技	なし
魔法技	ファイアボール 探索マジック エレキビーム 他
現在地	ハーストリア帝国 ゲベラルの川の畔
武装	なし
装備	ボロボロの白いワンピース、ボロボロの赤いスカート 他

次のレベルまであと、データがロックされています

「…なにこれ？」
 真はそんな突込みどころ満載の、わけのわからないステータスを見ながら、そう呟かざる負えなかったのであった。

少女の正体

「…これはいったいどういう意味だ」

真はデータが損傷しているとか、訳の分からないことが書かれてあるこの少女のステータスを見ながら、

頭に？を浮かべていた。

（…あれか？この少女はラノベに有りがちな、謎の美少女とか、そんな感じな奴なのか？）

真は自分が今まで読んでいた本を元に、シャーロックホームズの劣化版みたいな感じにそう推理したのであった。

「…」

真はちよつとした沈黙の後、この少女の寝顔をもう一度食い見るような感じで見つめた。

（… けどここはファンタジーな世界だから、他のパターンとしてこの子が逃走中のお姫様とか、奴隷商人から逃げ出してきたとか、モンスターに襲われて逃げだしていたら、いつの間にか迷子になって、焚火の光と俺の声を聞きつけてやって来たとか、そういう展開もありそうだな）

そんなふうに一応、これから起こりそうなことを予想するため、ファンタジーにありがちなパターンのことを考えながら、真は、少女が目覚めるのを待っているのだった。

「…起きねーな」

真がファンタジーにありがちなことを考えていた頃から、1時間くらいたったところ、真はたまらずそう呟いた。

現代日本なら暇つぶしにゲームやら、本などがあるため、これぐらいの時間ぐらい直ぐにたってしまうのだが、残念ながらここは異世界である、そんなものは存在しない、真もこの一時間、何度ゲームとかを本当に暇つぶしのために召喚しようかと思っただが、ようやく日の出とともに一気に回復した、3つしかない貴重な召喚数を無駄にはできないので、結局焚火に温まりながら、待っているしか、なかったのであった。

「…おーい、死んでるのか？」

息をしているのだから当然のごとく生きている少女に向かって、真は冗談げにそう言った。

「…おーいお姫様、起きてください」

真は少女の寝顔の前で手を振りながら起きるように促してみた。

「…すぴー…すぴー」

相変わらずそんなかわいらしい寝息を発しながら、真の声などまったく聞こえていないように、少女はかわいらしく寝ていた。

「はぁ…おーい、起きろー!!」

しかしこれ以上待つのは、さすがに耐えきれない真は、仕方ないので少女の体をゆすり動かしながら起こすことにした。だが…

「…だめだこりゃ」

しかし、まったくうんともすんとも言わない、まるで死んでいるかのように、少女は眠っていた。

「…ねこだまし…!」

「ぱん…!」

「…」

それでも起きなかった。

「おきろー!!朝だぞー!!」

大声で、しかも耳元で、真は叫んでみた。

「…すぴー」

しかし、真のそんな苦労をあざ笑うかのように、変わらずに寝ていたのであった。さながら、彼女を起こすのは、倒しても倒しても、何度でも湧いて出てくる敵を相手にしているかのようにもあった。

「…もしかして、わざとなのか?」

少女の反応を見ながら、普通、これ位したら直ぐ起きるはずであり、現に真は自らの母に猫だましを受け、目を覚ました経験もあってか、真がそう思ったのは無理なからぬことであった。

そしてこれが、のちの悲劇へと続く、フラグとも言つべきものであった。

「…にやり」

真は何か思いついたのか、近所の雷爺さん家にある柿の木から、柿をばれないようにとって盗むという、そんな今では絶滅した悪ガキのような笑みを浮かべ、すぐさま走って森の中へ行った。

数分後、少女の元へ戻ってきた真の手の中には、なにやら猫じゃらしみたいな物が握られていた。

「…ふふ、いいか、俺は悪くない、すべてはこの俺をあざ笑うかのように全く起きない貴女が悪いのである、よって、猫じゃらしの刑の処す」

真は小学生のころ、罰ゲームに猫じゃらしを鼻の中に突っ込み、くしゃみが出るまでくすぐっていたのを思い出し、子供心？的な感じにそれをすぐさま実行しようと思い、わざわざ森の中に生えていた猫じゃらしを持って来たのであった。

しかし、真はあることに気付かなかった、それはその植物が、見た目は確かに猫じゃらしみたいだが、中身は異世界独特のものだということに…

「…こちよこちよこちよこちよ」

そんなことなどつゆ知らずの真は、絶賛、心は少年時代に帰ってしまい、態々そんな擬音語を言いながら、如何にも悪ガキが浮かびそうな笑みで、一心不乱にかわいらしく寝ている少女の鼻の所を、撥つてみた。

「………はあ…はあ…」

数分間そうしていると、突然、少女の息遣いに変化が訪れた。

（よっしや、これは、くしゃみの前兆だな、ふふふ）

勿論そんな少女の反応を見て、真は勝ち誇ったような感じに、心の中にガッツポーズ浮かべていたのであった。

しかし、そんな余裕の笑みは、どんどん消えていくことになる。

「はあはあはあはあ」

「……」

「はあはあはあー」

「……………」

あれ？くしゃみしないナ…てかこの息遣い、どちらかと言うと興奮しているような…

真は明らかにおかしい息遣いに、ようやくそのことに気づいた。

「はあはあはあ、うんはああ」

やはり少女は興奮（性的な意味で）しているのだろうか、体全体が何だか火照ったように赤くなり、なお且つその声もまるで、下り坂を転がるボールのように、急転直下で、とてつもなく色っぽくなっていたのであった。

「はあはあはあはあうん…あん…」

（やばいやばいやばいやばいやばいやばいこれはやばい！！なんだか胸の中央あたりがとんがってきてるし、これ絶対に、アレだって、なんてエロゲ？的な、アツチの方向へ超音速の速さで突っ走ってるから！！…ってちくしょ！！こんな姿を見ても別にそこまでアレなことを何も感じないとか悲しいんだけど！！）

真はそんな少女の様子を見て、そして、それを見てもアレなことを

何も感じない自分を恨みながら

とりあえず、真は持っていた猫じゃらしを捨て、もう、何をすればいいのか分からないので、とりあえず、少女の体をゆすり動かした。

「ちよつ大丈夫か、大丈夫か、おい、とりあえず大丈夫か？」

どうやら、補正である高い精神力は、この時ばかりは発動しないのか、焦った声で真がそう言った。

「うんはあーもう、寝てなんかられにやい！！」

がば！！と、まるで寝ぼけながら時計を見ると、やべー！！もう9時！！完全に遅刻じゃん、そんな感じに慌てて起きる学生みたいに、少女はその叫び声とともに、飛び起きた。

「…はあ…はあ…はあ」

「…」

起きた後も、何だか未だに眠たそうな感じで、いまだにちよつとばかり漏れる色っぽい声をあげながら、呆然と立ちくしている真を少女は見つめた。

「…あんななのね…」

「へ？」

少女が突然上げたその呟きに、真は反応しきれず、そんな間抜けな声を発した。

「この変態！！」

「ばん！！」

そんなすつきりした音が、平手打ちされた真のほより、発せられたのであった。

「…すいませんでした」

ピンタがクリーンヒットし、真っ赤に腫れてしまったほを、真は右手で抑えながら、まるで親の仇を見るかのような眼で見つめてくる、少女に対し、真は謝罪した。

「…まさか、媚薬草をそんな使い方をするだなんて…あなたの頭可笑しいわね」

容姿に似合わず、少女はそんな強気な言葉を真に向かって言い放った。

「…いやだからさ、俺、まさかその草が媚薬草だなんて分からなくてさ、不可抗力と言うか、俺さ、その植物は猫じゃらしかと思って、その…すいませんでした！！」

少女の鋭い視線を感じた真は、もはや土下座しかない、そう思った真は、へなへなと土下座をしたのであった。

「…まあいいわ、貴方からは下心を感じないし、それに、この毛布見たいな物、私にかぶせてくれたのは貴方なんでしょ？それに必死に私を看病してくれたのは、体の回復具合から直ぐに分かるし、貴方が看病してくれなかったら私は死んでいたのも事実だし、私も寝起きが凄まじく悪いのは自覚している、だから今回だけは許してあげるわ…感謝しなさいよ」

少女は、ため息をつきながら、そして土下座しながら謝る真を見たあと、そう言った。

「…あっありがとう」

その言葉を聞いた真は、一旦そう言ったあと、土下座の体制から解放され、キチンと座った体制で、少女と向かい合った。

「…はあー、もうこの話は忘れよう、思い出すのも恥ずかしいし…それと…余ってる服とかない？」

「…？」

真は、一瞬何でいきなり服を要求するんだろうと思ったが、少女の服装を見て、有ることを察した。

「ああ、服が破れたからか」

なるほど、服もボロボロだし、そのまんまじゃ恥ずかしいのだということを察し、真はそう言った。

「…俺のジャンバー、着るか？」

残念ながら、他に着るものなどないので、真は自分の着ていたジャンバーを差し出すことにした。

「…ありがとう」

そう言つて、なぜか少女はちょっとばかり恥ずかしがりながら、真のジャンバーを受け取り、敗れたワンピースの上にかぶせるように

着始めた。

「…おっ俺の名前は山崎真、苗字が山崎で、名が真だ、君の名前は？」

その様子を見ながら、真はとりあえず、自己紹介だろうと思い、そういった。

「…ねえねえ、この私の傷口に張ってある物体は何なの？」
見事にスルーされた。

「…ああ、それは絆創膏という医療具だよ、俺の国にある足からの出血や傷口が外のほかの物と触れるのを防止するための道具さ、傷が治るまではっ付けといたほうがいいよ、大丈夫、害はない」

真はスルーされたことに落胆しながらも、もしかしたら、あまり言いたくないのでは？ と思い、ちよつと間をおいた後、したかない、また後で聞くことにしようと思い、ふと浮かんだ絆創膏の説明を、この少女にしてあげた。

「…へー、バンソウコウね」

少女は物珍しそうに、絆創膏を恐る恐る触ってみた。

「…見たことのない素材でできてる…それに、こんな医療具見たことがない、面白いわねこれ、ねえねえ、貴方どこの国から来たの？」

「…」

真は一瞬その回答に迷ったが、異世界と言ってもいらぬ混乱を招くだけだと思い、こういうことにした。

「…ここから東にもものすごく遠く離れた、日本と言う国から来た」
わざわざ出身地を偽るため、仮想の国を作るよりか、この世界には存在しないが、本当に自らの出身地である国名を、真は言うことにした。

「…二ホン…聞いたこともないわね…よっぽど遠くにあるのかしら…」
彼女はそんなことを考えながらそう呟いていた。

「…まあいつか、それより、ねえねえ」

「…はい？」

「お腹が空いたから…その…食べ物くれない？」
ぐぐと少女のお腹が鳴り響いた。

「…何この食べ物？ラーベツチ…ではないね…良い匂いだけど、なんて言う食べ物なの？これ？」

カップラーメンの中身を無気味げに、少女は見つめた。

「…それは、カップラーメンと言う、俺の国の食べ物だ、口に合うかどうかは分からないけど、今のところ食料はそれしかないし、我慢してね」

ガーベツチという、謎の食べ物はおそらくラーメンに近い物だろうと思いつながら、真は段ボールの中にあるはずの箸を探していた。

「あつたあた、これを使って」

そう言つて、真は箸を渡した。

「…これは、東の国が使っているとか言う二本棒…ごめんなさい…わたし、二本の棒は使えないのよ」

渡された箸を見ながら、少女はそう言った。

「そうか…それなら別に良いよ」

まあ、偶然転移した場所が、箸が使える地域だとは限らないし、そう思い、真はまた段ボールをあさり、中にあったキャンプの時よく

使うプラスチックでできたフォークを手渡した。

「じゃあ、フォークは？」

これならどうだ、そう思いながら真は言った。

「ありがとう、これなら使えるわ…ところで、このかつぱらーめん
だっけ？とりあえず麺から先に食べればいいの？」

少女はフォークで麺を突きながら、そう言った。

「…まあ、ふつうはそうやって食べるかな、まあとりあえず、麺か
ら食べてみてよ」

「…」

少女は麺を箸でくるくる巻いた後、よくテレビとかで、ラーメンを
食べたことのない外国人が、麺を日本人見たいに吸うことができず、
巻いた麺をそのまま口に運んで噛み切ったように、少女もそのよう
にして食べたのであった。

「…っ！おいしい」

少女はそう言った後、すぐさま、また麺をくるくる巻きつけると、
何故か震えた手つきで食べ始めた。

「…おいしい、何これ美味すぎる、魔法を使った形跡もないのに、
こんなに美味しいだなんて…」

そんなことをいいながら、よほど腹が減っているのか、それともあ
まりにも美味しさのせいなのか、少女はがむしゃらに、カップラ
ーメンを食べていた。

「…」

とりあえずどうしようか、真はがむしゃらにカップラーメンを食べ
ている少女を見ながら、そう思った。

（…とりあえず、今まで少女のペースで流されてしまった感のある
自己紹介をすべきだろう）

如何思った真は、とりあえず少女が食べ終わるのを待ち、その後自

己紹介しようと思ったのであった。

「ああ美味しかった、貴方の国ってどうかしてるわ、魔法なしでこんな美味しいものを食べれるだなんて、ねえねえ、おかわりある？」

いつの間にか、食いしん坊キャラとなってしまうている少女を見ながら、真はとりあえず、先ほど考えた自己紹介をすることにした。

「…なあ、とりあえず自己紹介ぐらいはしようぜ、未だに俺さつき紹介したまんま君の名前も分からないしさ、とりあえず、俺の名前は山崎真、苗字が山崎で、名が真だ」
真は一応、もう一度自分の名前を言いながら、少女に自らの名を言うように目線で促した。

「…自己紹介ね…」

少女はなんだか暗い顔を始めた。

「…なんだ？言えない名前なのか？」
逃げ出した、王女様ならそんなこともあり得ると、真はいつの間にかそれが前提と言う中二的な思考になりながら、そんなことを言ったのであった。

「…いや、そういうわけじゃないのよ…」

「…じゃあ、なんなんだよ」

違うのか、じゃあ他の、奴隷商人から逃げ出したとかそういうのかな、と真はそんなありがちな展開をまたもや思っていた。

「…その…」

その言葉の後…少女は予想外の爆弾発言をした。

「自分が誰だか…分からないのよ…名前も、今までのことも」
空になったカップラーメンの用器をフォークで突つつきながら、名
のない少女は、そう呟いた。

少女の正体（後書き）

ただいま1868年までに開発された兵器を募集中です。

これを使ったほうが良いのではないかとか、これを使ったら面白いとか、そういうのがあったら教えてください。

記憶と心を取り戻す覚悟

「…なるほどね…自分が誰で、そして自分が今まで何をしていたのかも覚えていない、詰まり、記憶喪失って奴か…」

先ほどの少女の発言に、真はかなり驚き、その後少女の詳しい説明を聞いたあと、そう言った

「…うん…だけど、自分のこと以外は思い出せるの、いわゆる一般常識とかは覚えてるんだけどね、言葉だってキッチンとしゃべれるし、世界の国々や、食べ物の名前なんかも、キッチンと分かるし、自分のことが分からない以外は、日常生活に支障は出ないしね」

名を失ってしまった少女は、悲しそうな目で地面を見つめながら、そう言った。

「…そうか…」

まさか記憶喪失とは思っていなかった真は、そんな悲しそうな顔をしている彼女の顔を見ていた。

「…」

「…」

「パチッパチッ」

真たちは何だか気まずくなり、焚き火の音だけが鳴る、沈黙が訪れた。

（記憶喪失か…この人の顔を見てみると、ホント、ドラマで見るのとは全く違うということがわかるよな…）

真は、記憶喪失と言われても、そんなもの、物語の中でしか見たことがなかった、だから、お世辞にもそのようなものが身近にあるとは言いがたいものであった。

だが…いまは違う、現実的に、自らのすぐそばにいる少女が記憶喪失なのである。

「…」

真は自分がもし彼女と同じような記憶喪失になったような気持ちを思い浮かべてみた。

自分の名前が分からない…その間隔はなんだかまるで、世界が現実の世界でなくなるような感触、そして暗転とした心、強い不安、まるで車酔いを起こしてしまった自分が、無理やりコインロッカーの中へ詰め込まれ、ぐるんぐるんと高速回転されてしまうような、そんな考えたくもない感触…

「…」

真は少女を見つめた、今の精神力を持っている真でも、つい鳥肌が立ってしまうような、そんな恐ろしい感覚を、この少女が実体験しているのかと思った。

だが…

それ以降はなぜか何も感じなかった、それしか、真は感じなかった。この子が可哀そうだとか、哀れだとか、慰めてあげようとか、そう言った本来は起きるはずであった感情が起きないのであった、精神が弄られたせいなのだろう。

「…ちっ」

そのような当たり前に起こるはずの感情が湧かない…そんな自分に腹が立つし、まるで心が自分の物じゃないみたいで、気分が悪くな

りそうでもあった。

「…あ」

そのとき、真の頭の中にある言葉が浮かんだ、何の感情も抱かない自分の心に喧嘩を売ってやろうとも思っただかもしれないそんな言葉を、そして自分をこんな心にしてしまった奴に、仕返ししてやろうと…その自らの憎ったらしい心を、逆に利用してすることで…普段の自分なら恐らく浮かんでも実行できないような言葉を…元の世界では、浮かんでも絶対に恥ずかしくて言えそうにない言葉を言うことができた。

「じゃあさ…俺と一緒に、お前の記憶を探しに行く、旅でもしようぜ」

そんな現代日本において、クラスメイトに告白するぐらい勇気のいる言葉を、真は、憎らしい自らの心を利用することによって、躊躇うこともなく、言うことができたのであった。

そしてその言葉は、何も感じない自分の心への、真自身の意識による抵抗だったのかもしれない。

「……私の記憶を探す旅？」

少女は驚いたような顔で、そんなことを言う真の顔見つめた。

「そう、おまえさあ、どうせこのままじゃ一人だろう、ただでさえ記憶喪失で大変なのによ、一人だったら絶対に大変だ、それに、俺もちよつとばかり旅の仲間も募集していたところなんだ…ここで会ったのも何かの縁だし、俺も別に目的と言っても、故郷に帰るぐらいしかないし、ちよつとぐらい寄り道しても変らん、さらにだ、俺はこら辺にある国こととか、仕組みやら文化のこととか、まったく言っていないほどよく知らないんだよ、だからな、お前なら、こら辺に国のこととか詳しいだろう、だからさ」

真は言った、

「その見返りとして、記憶喪失のことでお前の心が苦しくなったら、その心を支える柱として、俺が支えてやる、記憶を探しきるまで……だから、俺と一緒に旅に行こうぜ」

笑顔で、おそらく、ラノベ的展開になりたいとか、そんなものではなく、本心で、この子と一緒に旅がしたいと……

「……」

「……」

「……ふふふ」

「……へ？」

少女は突然、その鈴のような声で、笑い始めた。

「フッフあはははは、貴方って面白いね、会って一日もたってない人にそんなことを言うだなんて」

「……」

真は沈黙していた。

「でもね」

少女はそんな様子の真を見ながら、笑顔で言った。

「私、実は怖かったの、いままで真になんとか強気な姿勢で言っていたけれど、やっぱりさ、自分が誰なのかも分からないってものすごく怖くって、自分が今まで何をしていたのかも分からないのだから……それってやっぱり怖いよね、だって、もしかしたら私、記憶失う前の私は、大量殺人犯なのかもしれない、そう思うと、耐えられないくらい怖くって」

少女は下を向きなら、そして、おそらくその言葉を感情的に強く言

ってしまった影響だろうか、いつの間にか少女は涙を流していた。

「…だからね…大げさかもしれないけど、嬉しかったの、貴方のそのつい笑っちゃいそうな言葉が…貴方が私のその可笑しくなりそう心を支えてくれるというその言葉が…」

真は、彼女のその言葉を聞きながら、なんだか自分の心が溶けていくような感じで…だんだんと…真の心がちょっとだけ、自分の物に戻ってくるような感触がした。

「いいわよ、真、あなたと一緒に旅に出ても」

真は、その言葉を聞いたあと、良かったと思ったが。

「…けどね…ちょっとだけ条件があるの」

少女はかわいげな笑顔で、そう言った。

「貴方に、私の名前を決めてほしいの、この可笑しくて、倒れてしまいそうな心を、支えてくれるあなたが…私の心を支える為の、柱を作ってほしいの」

「…」

真は、未だに目を涙で濡らしている少女の顔見ながら、自然と、まるでそれが常識かの様に、彼女の名前を考えた。

「…」

真が見つめる少女のその顔には、未だに渴いていない涙を含んだ、美しい澄んだ空のような瞳と、そして、そこに垂れかかる淡い、まるで宇宙から見た地球のように青い髪…

「…」

真はふと空を見上げた、排気ガスとか、そんな空を汚すものがない世界にある、澄んだ青空、その空はまるで、目の前にいる名を失ってしまった少女その物のような感じがした。

「…ソラ」

真が言った

「青空のように美しい瞳と髪を持っている君にちなんだ ソラ、という名前はどうだ？」

真は少女に向かって問いかけた。

「…うん」

少女は答えた

「私の名前はソラ、真と一緒に旅する者、よろしくね」
少女の顔には、もう涙はなく、名前と言う支えを持った、美しく可愛らしい、青空のような笑みが浮かんでいた。

その少女の笑顔を見ながら、真はこれからの旅について思いをはせていた、少女の記憶を取り戻す旅…そして、自らの心を取り戻すための、旅に…

記憶と心を取り戻す覚悟（後書き）

批判、称賛問わず、感想＆評価を頂けると、作者はパワーアップします。

たぶん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9945x/>

現代的なもので、ファンタジーを旅する。

2011年11月16日19時30分発行